願願（ねがねが）

いちの　くう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
願願（ねがねが）

【Ｎコード】
Ｎ０１６４Ｗ

【作者名】
いちの　くう

【あらすじ】
『あの日をもう一度と願わずに願ったその日から――』を略して『願願（ねがねが）』。
大切な人が死んでしまった男子高校生のその後。
鬱時々妄想の学園ファンタジー。

設定集（はじめに）

【はじめに】

この作品は『学園（ファンタジー）』モノですが、『ダーク』『恋愛』『異常行動』『おそらくＲ１５』などの部分が含まれています。ご注意ください。

【別視点でのあらすじ】

ある日大切な人を殺してしまった高校３年生の星川一矢。
その後は抜け殻のような生活だった。
高校最後の夏休みも同じだったが――ある事をきっかけにケリをつけようと決意した一矢は……。
鬱時々妄想の学園ファンタジー。

【タイトルの由来】

正式名は『あの日をもう一度と願わずに願ったその日から――』。
それを略して『願願（ねがねが）』です。

以前は『あの日をもう一度』というタイトルでしたが、この物語に対する正しい表現ではないと考え、変更させていただきました。話自体が重くマイナス的発想が多い作品であるのでネガティブの言葉をかけて、

・そのまんま『あの日をもう一度』

・『あのその』

などの候補をおさえて『願願（ねがねが）』にさせていただきました。

【主な登場人物】

星川　一矢（ほしかわ　かずや）
　主人公。高校3年生。元陸上部。

姫島　唯（ひめじま　ゆい）
　高校3年生。ある事件によって命を落とす。

四ノ宮　若葉（しのみや　わかば）
　高校2年生。陸上部。一矢の後輩。

龍野　舞（たつの　まい）

1

主な登場人物

星川　一矢（ほしかわ　かずや）
姫島　唯（ひめじま　ゆい）
四ノ宮　若葉（しのみや　わかば）

８月夏。テレビでは投げて打って走っての熱い戦いを繰り広げている甲子園がやっている。

『さあ、９回表。２アウトながら３塁にランナー。還ってくれば同点です』

チャンネルを変える。天気予報がやっている。

『北海道を除き全国的に暑い日が続いています。さて、１１時現在の気温ですが、甲府では３５．８度を記録しています。東京、千葉、横浜でも３０度を超え――』

テレビを消した。どれも頭の中に入っていかない。

暑いとはいっても、この部屋はエアコンで２７度に設定されていて快適だ。結露の湖に氷の入った麦茶のグラスが浮かんでいる。

「ふぅ」

ため息１回。どうも身体を動かすのが面倒くさい。しなければならないことはたくさんあるのだが、身体が動いてくれない。……動いてくれない？　動きたくないの間違いじゃないのか？　自分自身に聞いてみる。

「そう……なのかもしれないな」
脳内の質問に答え、目を閉じた。
眠たい。寝ようか。今寝るとまた夜遅くまで起きてしまうことになる。どうする？　……寝よう。

星川一矢は高校３年生だ。つまり今は受験の夏である。そして今日は予備校の夏期講習がある。朝の９時からなのだが、現在は１１時３１分。早く終わって帰ってきたわけではない。家から出ていないのだ。
理由は考えればいくつもある。暑い、だるい、動きたくない、行きたくない、眠い、何となく、ただこれらはほんの数パーセントにすぎない。一矢を夏期講習に行かせない、家から出られなくしている原因は他にあった。

去年の晩夏に行われた文化祭――の前々日。当日に向けてどのクラスもラストスパートをかけていた。
一矢は休憩するために３階の教室から１階に下りて自販機でパックのジュースを買った。そしてまた教室に戻ろうとした時、見覚えのある後ろ姿を確認した。
「おーい、唯」
見間違うはずもない。隣のクラスの姫島唯。嬉し恥ずかし一矢の彼女だ。
唯は家から自転車通学のため買出しに行っていたのか、１ｍはある板を５本両手に抱えていた。
「なんだ、それ。買出し？」

「うん。今男子が教室の大道具やっていて手が空いているのが私だけだったから」
「持とうか？」
「いいよ、大丈夫。あっ、コーヒー牛乳だ」
唯の目線が一矢の右手にあるパックのジュースに移った。
「飲む？」
「うん」
口元にパックのストローを持ってくると唯は器用に頭を前に出してゴクゴク飲んだ。
「おいおい、飲みすぎ……」
「っはぁ！　あ～、五臓六腑にしみわたるってこの事なんだね」
「何歳だ、お前は」
2人の笑い声。2階を過ぎて踊り場から3階へ1段2段と上がっていった。
今はもう止んでいるが早朝まで雨が降っていた。雨後の湿度とその後の晴天。不快指数は高く、学校内のタイルの床を滑りやすくなっていた。『廊下を走るのは危険です』は一年中張り出されているから褪せてきている。が、そんなことはどうでもいい。
ふざけていたわけではない。持っている木材を持ちかえようと少しずらしたのが失敗だった。
「あっ」
突然横にいた唯が視界から消えた。声と同じく見えなくなったため、一矢が後方を振り返るとこちら側を見つめる唯がいた。瞬間の出来事のように今でも常に写真で見ているかのようなスローモーション。そして唯は頭から着地した。
床と頭が接触し、ゴッとしか表現できない音。直後にかき消すかのような宙に舞った木材が床に落ちるガラランという衝撃音。そして他の女子生徒のきゃあーという悲鳴。うわぁーとか落ちたとか先生だとか警察だとか救急車だとか、耳から入って耳から抜ける音。
全てを見て全てを聞いた。全く動けなかった。

血が後頭部から流れ出たから？　違う。
彼女が助からないと思ったから？　違う。
動いても無駄だと思ったから？　違う。
彼女は実は軽症で、その後保健室で包帯を巻いて帰ってきてという想像をしていたから？　違う。違う。どれも違う。
「……うっ」
ようやく動けたと思ったらそれは急激な吐き気だった。必死に口を押え、残りの階段を駆け上り、３階男子トイレに駆け込んだ。
「おあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁうろぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁごぉぉぉぁぁぁぁぁ」
吐いた。吐き続けた。ひざまずいて洋式便器にひたすら吐いた。
――再び戻った時にはそこに唯の姿はなかった。乾き始めていた赤い血だけだった。あとで気づいた事だが、自分が戻ってくるまで５０分も経っていた。

唯が足を滑らせて階段を落ちた。それだけだ。不運な事故だ。……そう、果たして言うことができるのだろうか。
そもそも重たそうな木を持っている彼女を見て「持つよ」ではなく「持とうか？」と疑問形であるのがどうかしている。それにもう１回聞いてみれば唯の態度も変わったのではないか。
また、自分は唯を見ていた。バランスが崩れそうになったら手を出すくらいの事はできなかったのか。
あの時自分の右横に唯がいた。そして自分の右手にはパックのジュースがあった。ジュースが邪魔で手が出せなかったのか。ジュースを持っていても腕で支えるくらいの事はできたはずだ。たかが１００円のジュースだ。放り投げても差し支えなかったはずだ。１０

０円のジュースと彼女と自分はどっちを選択したのか。明らかに１００円だ。
それに倒れた時何故真っ先に駆けつけなかったのか。何故立って見ているだけなのか。せめて駆け寄っていれば何か変わったのではないか。
お前は何だ？
何をした？
お前が気の利いた行動をしていれば、手が出ていれば、腕で支えていれば、駆け寄っていれば、こんな事にならなかったんじゃないのか？

「……ぐっ」
日光で熱くなったベッドにあおむけになりながら涙を流した。真夏の昼に馬鹿男が泣く。全て自分が悪い。責任は自分がある。
「ゆ、唯……ゆぃ……」
もうこの世にはいない。自分が殺した。
あの日から、夢の中にでさえ彼女は出てこなくなった。それまでは１週間に一度は見ていたというのに何て情けない。
夢は強く考えている事や思っている事が一番出てきやすいそうだ。つまり彼女が死んだ時に自分の中の彼女の想いが消えたということだ。何て薄情な男なのだろう。
葬儀の時に自分は彼女の両親から逆に感謝された。全て自分の責任だと説明したのにも関わらずだ。
今まで一緒にいてくれてありがとう、唯も幸せな生活を送れただろう。
責められた方がどれだけ楽か。この世には善と悪が存在する。自分は誰もが憎むべき悪なのだ。それなのに感謝されたらどうすればいいのだろう。悪者にもなれなかった自分はどうすればいいのだろう。

2

蝉が鳴いている。まぶしすぎる外はとても暑く、すでに思考回路がどこかやられていてコンビニに行こうという考えも思い浮かばない。

でも何故か一矢は学校の前にいた。決して自らの計画的な行動ではないのだが、ふと気が付くと学校にいた。何故こんなところに来たのだろう。自分でもわからない。いつ家を出たのかもわからない。わざわざ電車に乗ってまでここへ来たのだからそれ相応の理由があるに違いないのだが、思い出せない。

太陽に背部を力強く照らされて、ようやく外にいるのは暑いという明確な意識が生まれ、まずは校舎に入ることにした。

冷暖房はついていないが、風があるために多少は涼しい。持ち帰らなかった上履を履いて教室に向かう――その途中。2階を過ぎた踊り場。タイルはきれいにされ、その隙間にですら血の痕跡はない。

しばらくその場に立っていた一矢は唯が倒れた姿と同じような格好で自分もそこに寝た。何かが変わるような気がして。でも何も変わらなかった。

自分の不甲斐なさに怒りが込み上げてくる。

「やっ！」

そんな声が聞こえ、声のする3階のフロアを見ると一矢を見下ろす顔見知りの顔があった。

「っ……四ノ宮さん？」

四ノ宮若葉。長距離を得意とする陸上部の2年生で一矢の後輩だ。

一矢は慌てて身体を起こし、Tシャツ、短パン姿の彼女を見上げた。

実は若葉も唯が転落した瞬間を見ていた。2人が階段を上がっていくのが見え、自分も2階の教室に戻ろうとして……2人が気になってそのまま階段を追うように上った。あと数段で踊り場というと

ころで何かが飛び込んできた。それが何かを認識する以前に、瞬間的に声が出た。
「……あっ、休憩？」
「はい。飲み物を取りに……その、先輩は……？」
これはまだ誰にも言っていないことだが、若葉は一矢のことが好きだった。あまり一目ぼれをするようなタイプではないが、入学して陸上部に入った時、先輩の顔ぶれをみて何となくだが感じるものがあった。
失礼な話、一矢は格好良いわけではない。陸上部としては中距離を得意とするメンバーの中では3番目、エースでもない。そんな一矢に何を思ったのか若葉自身にもわからない。が、その日から『気になるあいつ』になったのだ。
「あ……これは……」
一矢は若葉が自分を好きなんじゃないかというのを陸上活の友達から聞いた。言われて初めて自分に対する視線が多いように感じた。しかしそれを聞いて特別に行動を起こすことはなかった。
もし相手が男友達や別の奴らなら違う対応をしていたのかもしれない。単にうまい言い訳が浮かばなかったというのもある。口が勝手に動いた。
「何だが唯のことを思い出してさ。ハハハ、こうすれば何かわかるんじゃないかと思って。でも、何もわからなかったけどね。ハハハ」
何を言っているんだ、自分は。
「ちょっぴりなりきるこんな俺もかっこいいかなって、ナルシストみたいな部分もあって。ハハハ」
ダメだな、こりゃ。そう思っても口が止まらない。
「よく過去にとらわれる男はダメ人間っていうじゃん。確かにそうかもしれないけど、やっぱり人間なんだから過去を背負って……生き……て……いか、な……け……」
終わった。
人にそれも一番見られてはいけないであろう相手にこんな姿をさ

らけ出してしまって、自分は何をしているのだろう。
笑ってくれ。
軽蔑してくれ。
格好悪い先輩だろ。
涙が、鼻水が止まらない。こんな時に塩味を感じなければいけないなんて情けない。
「私じゃだめですか？」
場違いのようにそんな言葉が聞こえた。一発で涙が、鼻水が止まった。
今……何て？
見上げたにじむ視界には確かに自分を見ている若葉の姿。真剣とも穏やかともとれそうな表情のまま若葉は1段ずつ階段を下りる。
「姫島先輩があんなことになって私も悲しいです。でも先輩の方がもっと悲しいはずです。……先輩の気が少しでも落ち着くなら、私を自由に使ってください」
若葉が陸上部で一矢と会った時にはすでに2人は付き合っていた。その事は後に知ることになったので、もちろん告白はしていない。想いが途切れることなくずっと片想いのままだった。
一矢はこの子は何を言っているんだ、とは不思議と思わなかった。唯という大きすぎる存在をなくすことが無理なら、自分が1枚のオブラートになってでも包んであげようと彼女は言っている。
「それって……」
「……先輩のことが好きなんです」
彼女は自分の事が好きだ。それはわかる。その彼女の好きな相手が地の底まで落ちているのを自分の身体を使ってでも助けたい、救い上げたいと申し出ているのだ。この提案に対する解答はいかがなものか。
濁そうか。そう思ったのだが、彼女はここまではっきりと言ってきている。となると自分もはっきりとした答えを態度で示さなければ。

一矢は自然と若葉を抱いていた。
「あ……」
瞬間、若葉から声が漏れた。人を抱くという行為を行ったのはどれくらいぶりだろうか。一矢はこの時ばかりは間違いではなかったと思った。
時間が経つのを忘れていた。次に自分が何をするべきなのかも考えなかった。ただこのままでいたい、それだけが勝っていた。
「んーーっ……ぃ」
「？」
繋がる過去の記憶。彼女の部屋で2人抱き合ったあの感じと似ている。思えば昔もこんなことをしていた。ちょうど後ろで手が組める体躯、指先で感じる皮膚の弾力、胸に伝わる温かさ、頬に伝わる髪の艶やかさ、鼻に薫るフェロモン、そして右の首筋にあるほくろ……がない。
「唯？」
であるはずがなかった。いまここにいるのは一矢と若葉の2人だけなのだから。
「先輩？」
驚いたのは若葉だ。身をささげて抱かれたと思えば出てくる言葉が別の女だ。代わりでも、という気持ちで出したのだから相手の受け止め方によって扱いは異なる。少し、いやかなり自意識過剰だったのか。
一矢だってなぜこの名前が出てきたのか、自分でも疑問だった。いつの間にか抱いていたものが抱いている間に自分の中で変わっていたのだから。結局変わっていないのは自分の頭の中だけなのか。
互いの素の顔が出た。下手ににやけているが、もう引き返せない。先に引いたのはやはり一矢だった。
「お、俺……今……」
血の気が引いているのが見てわかる。
何かこの結末の説明をしようとするも適当である言葉が出てこな

い。というより語るに足らず。今更何を説明しろというのだろう。
一矢はただ距離をとるしかなかった。背中は向けられないが、近づくことができない、近づいていられない。1歩ずつ下がっていくだけだった。
後ずさりする一矢そして若葉は気付いた。一矢の足の数十ｃｍ後ろ、そこには2階へと下りる階段があった。
「先輩、危ない！」
飛び出す若葉。一矢は言葉の意味を理解できる状態ではなかった。こちらに向かって走ってくる若葉に触れるのが怖くてさらに身体を引いた。
「あっ！」
「先輩っ！」
若葉の手がかろうじて一矢の腕を掴んだ。しかしその時には若葉の両足が宙を舞っていた。
スローモーションのように、しかし遮るものは何もなく2人は階段を落ちていった。

3

終わったよ。何もかも。
それから5日間。一矢はずっと部屋にこもっていた。
あの時、一矢が落ちそうになって若葉が追いついたものの支えきれず2人で転げ落ちたあと、どれくらい経ったのか一矢は目を覚ました。すぐ横に若葉がいた。辺りには誰もいないことから、気を失ってそれほどはしていないみたいだった。
身体を起こす。尻が痛いが、特に怪我はしていないようだ。
「四ノ宮さん。四ノ宮さん！」
あのフラッシュバック。唯と姿がかぶる。血は出ていない。とにかく生きていてくれなくては困る。もう誰も自分のせいで死んでほしくない。そんな事を考える余裕はなく、ただ若葉に対して声をかけていた。
「……ん……せ……んぱい？」
「四ノ宮さん、わかる？」
「……はい。……先輩ですよね」
若葉の無事を確認すると、緊張が抜けたあまり涙が出そうになった。それをこらえる。
若葉の身体を起こした。
「大丈夫？」
「はい。ちょっと身体を打っただけで特に痛いところは……っ！」
顔がゆがんだ。瞬間的に左足首を押さえた。
「だ、大丈夫！？」
「ちょっと……ひねったかも」
「……せ、先生に言わなきゃ」
「いいです、先輩。先生には私から言っておきますから」
「でも、俺のせいで足を……」
「いいんです。私の不注意です。私が勝手に足をひねって」

「いいや。俺のせいだ。俺が、四ノ宮さんを……」
「先輩！」
全てが自分のせいでこんなことが起きたのだから、せめて自分ができることはしたい。そんな一矢の気持ちも今の若葉には重すぎた。
若葉は一矢の両肩をつかんだ。強い視線に一矢はひるんだ。
「先輩のせいなんかじゃありません。そうやって自分を追い込むのをやめてください。……唯先輩を忘れられないのはわかりますけど、だからって先輩ひとりで抱え……込むのは見ているだけで辛いです……」
涙を流す若葉を見て一矢は思った。自分は知らないうちにこうして周りの人間にも害を与えているんだ、と。
自分はなんて最低な人間なんだ。いや、もう人間なんかじゃない。唯の事といい、若葉の事といい、もう俺は悪魔なのではないかとも思ってしまう。
まさしく人間とは呼ぶにも難しいような後ろ姿を見せながら一矢は学校をあとにした。

死のうか。
６０７にある一矢の家は１２階建てのマンションだ。屋上へ続く階段にはドアはなく、高さ１．５ｍほどの柵になっている。だから登ろうと思えば誰でも可能だった。
さすがに遺書くらいは書こうとしたが、書く相手を思い出したらきりがないので、
『みんなへ　ごめんなさい』
とだけノートの最後のページにボールペンで書いて机の上に置いた。
遺書は書いた。靴もそろえた。あとはここから飛び降りるだけ。

下を見ると赤いタイルが敷き詰められた歩道とグレーの車道と白い日傘をさして歩いている人がひとり。不意に小便がしたくなった。
飛び降りよう。
きれいさっぱり何もかも捨てて死のう。
自分にナイフを突き立てるより、ロープで首をくくるより、電車に飛び降りるより、思いつくかぎり一番苦しくなくてコストがかからない方法。
「……さよなら。みんな」
はじに立つ。足を一歩踏み出す。これで完了。
はじに立った。足を……足を……足を？
何故だ、足が前に出ない。動かない。じゃあ、右足がダメなら左足だ。
足を……足を……足を……足を……足を……足を……。
何でだ？　どうして足が前に出ない。どうしてだ？　死ねない。
「……出ろよ。足……この足ィ！　出ろよ！　前に出ろよォ！　このあし……でろよ……」
つまり自分は死ぬことすらできないモノだった。

「……ハハハ」
死ぬことを挫折して30分。既に3歩下がった場所に座り込んでいた一矢。残った選択肢は『笑う』くらいだ。
「ハハハハハハハッ……ハハハハハハハッ……ハハハハハハ……」
笑いが止まらない。何がおかしい？　何が面白い？　死ねない自分が？
笑え。笑え。とことん笑え。笑って死ねれば最高だ。
「……帰ろう」
1本の映画を見終ったかのように、重い腰を持ち上げ立ち上がった。
もう先ほどまでの気持ちは音もなく根元から折れ、生前のような

過去の話になっていた。
戻ろうとして後ろを振り向くと、
「！」
目の先、１０ｍほど先に少女が立っていた。
一瞬唯と思ったが完全なる見間違いで、着ている服が以前唯が来ていた私服に近いだけで顔は全然違う。
年は唯よりも少し背が低い。やや表情が硬く、顔立ちは幼く整っている。中学生……だろうか。
いつからここにいたのだろう。この一部始終を見られたとしたらかなりヤバイ。それこそ本当にここから飛び降りたい。
「自分が死んで全てが終わると思ってるの？」
「！」
やはり見られていたらしい。死にたい。今なら本当に死ねると思う。
「自分が死んで全てが終わると思ってるの？」
「だ、誰だよ」
少女の同じ質問に一矢はそう返すのが精一杯だった。
「質問に答えて。質問に答えられないの？」
死のうとしていたこちらも問題はあるが、なんて失礼な奴だろう。一矢が答えにつまっていると別の質問をしてきた。
「死ねなかった原因は何？　彼女が死んだから？　別の女の子に怪我をさせたから？　ただの自己満足？」
「な……っ」
どうしてそんな事を知っているのだろうか。この少女は一体何者なのだろうか。
答えとどうしての質問に詰まっている一矢。少女は遠慮なく発言を続けた。
「２度も相手を傷つけて自分は生きている意味がないと思った？」
「ど……どうしてそんな事知ってるんだよ！」
「んー、そこにいたから」

初めて少女が考えた仕草をしたが、答えは理解できないものだった。
「はっきり言うけど、あなたが死んでも何も終わらないわよ。なにひとつ解決しない」
「お前なんかに何がわかるんだ。お前に俺の気持ちなんかわかるもんか」
「わからないわよ。というよりわかりたくもないけどね」
まだ状況が完全に理解できないが、現時点で言える事は2つ。少女は一矢の事を知っている。そして自殺を止めようとしている。
「じゃあ、ここに何しにきたんだ？　俺が自殺するのを止めに来たんだろ？」
「別に。暇だったから。まさかこんなところで死のうとしている人がいるなんて思わなかった。私の人生じゃないし、死ぬのはその人の勝手でしょ」
当てが外れた。なら、もう1つ。
「じゃあ、どうして俺の事を知っているんだ？　それにここの住人じゃないだろ」
「……」
何故かその質問だけには答えなかった。後半は勘だったが、ビンゴのようだ。
少女の弱みを握った一矢。形勢逆転だ。
「どうしたんだよ。答えろよ」
「……そんなのどうだっていいでしょ！　それより死ぬの！？　死なないの！？」
よほど答えたくない質問だったのか、すぐに一矢の最大の弱みを突いた。
一矢は追い込まれていたが、先ほどまでの勢いもあってか格好つけるように吐く。
「……死ねるかよ。人がいる前で。アホくさい」
身長差を利用して少女を横目で見下すように通り過ぎ、柵を乗り

越えて家に戻った。
煮え切らない気持ちと反する虚勢がそれぞれ許せなかった。
目の前のコンクリの壁を蹴った。
「っーー！」
この痛みがせめてもの償いだ。

1話　人間じゃない　完

1

主な登場人物

星川　一矢（ほしかわ　かずや）
龍野　舞（たつの　まい）
姫島　唯（ひめじま　ゆい）

こんな時でもお腹がすく自分がとても嫌いだ。
夕食だと母親に呼ばれダイニングへ向かうと、帰りが早い公務員の父親は発泡酒とグラスを用意して椅子に座っていた。
「なに、これ」
いつもとテーブルの上が違う事に気が付いた。
冷蔵庫や流し側に父親と母親。反対の電子レンジ側に一矢なのだが、その横にも食器が用意されていた。それにいつもよりおかずが豪華で多い。
「え？　なにって言われても……」
母親が用意して当然という顔をして返答に困っている。
「なんだ、一矢。忘れたのか？」
「は？　何を？」
「だって今日でしょ。舞ちゃんが来るの」
「……マイチャン？　誰それ？」
親戚か友達、知り合いにマイチャンと呼ばれている人などいただろうか。一矢は少し考えたが、どの顔も思い浮かばなかった。

「何だ何だ、一矢。昨日話しただろう。姫路のおじさんの知り合いで家庭の事情でしばらくウチに世話になる女の子が来るって。龍野舞ってお前と同い年の女の子だよ」
「……今聞いたよ。そんな事」
「おいおい、まさか昨日テレビを見ながら聞いてたんじゃないのか？　……もう着いてもいい頃なんだけどな」
確かに姫路に親戚はいるが、そんな話は初耳だ。これほどの話であれば普通聞き逃すことなんてないだろう。
壁にかけられたアナログ時計の針は7時ちょうどをさしていた。そこにチャイムが鳴った。
「着いたみたいね」
このモヤモヤ感を払拭したい一矢は母の後についていった。
母親は到着を待っていた通販の小包を取りに行くかのように小走りで玄関に向かう。ドアノブを回して押し開く。と――
（え？）
そこに立っていたのは何度見直しても、あの屋上で会った少女だった。

廊下で立ち尽くす一矢を少女は特に顔を向けることなく横を通り抜けた。
そしてダイニングにて4人が集まった。
「一矢。話した舞ちゃんだぞ」
「龍野舞です。よろしくおねがいします」
深く礼をする舞。肩に微かにかかる艶やかな髪がスルリと落ちた。
「いいよいいよ、舞ちゃん。そんなにかしこまらなくてもしばらくウチで過ごすんだから自分の家と思っていいから」
父親の言葉に母親も続く。
「そうよ。それじゃあ、まずその荷物を置いてきた方がいいかも。部屋は――そうそう、一矢。舞ちゃんと相部屋になるからすぐに片

づけときなさい」
「はあ？　聞いてないよ。ってか何で俺の部屋なんだよ」
「あんたこそ何を言ってるの。空き部屋がないんだから当然でしょ。まさかあんた廊下で寝る気なの？」
確かにリビングダイニングを除けば両親の部屋か自分の部屋。状況としては至って妥当だ。しかしというかやはり最後の言葉が引っかかる。何故俺が出るのか、と。
母親はそんな気持ちを知ってか知らずか舞にだけ気を配っていた。
「ほら、荷物も今日届くんだからさっさと片付けにいった！　ごめんね、舞ちゃん。あんな息子との相部屋で。狭い部屋だけど自分の部屋のように使っていいからね。何かあったら遠慮なく言っていいのよ」
「いえ、私の方こそ厄介になる身なので遠慮なんて……」
そんな小さな声を背中で聞きながら、一矢は自室の床に散らばった漫画類を片づけるのであった。
とりあえず今はスペースを確保した方がよさそうである。半ば投げやりに雑誌類は処分することにした。衣類はタンスに押し込むように入れ、ごみ袋は縛って玄関前に置いた。これで床の面積は確保できた。
自分は何をしているんだろう。この妙に少し広くなったような空間がまた1時間後には彼女の荷物と布団で占領されるのだ。女の子との相部屋ワッショイという言葉は心のどこを探しても出てこない。
グゥゥ
こんな時でもお腹がすく自分がとても嫌いだ。

夕飯を食べ終えたのはそれから２０分後。
一矢の横の存在、空気の壁を感じつつ食べる夕飯はいつにもなく無味に感じた。適当に流し込んで部屋に引き込んだ。
何もすることなくただ壁を眺めているとダイニングの方から食器

を洗う洗わないで揉めている声が聞こえてきた。
「いいのよ。ただでさえ慣れない所に来てるんだからゆっくりしなさい。……一矢に爪の垢煎じて飲ませたいくらいね」
よけいなお世話だ、と思った。
しかし壁を見る以外の刺激のおかげで一矢はゲームで遊ぶという選択肢を選んだ。理由は自分の時間を過ごせるからだ。
遊び始めて１０分後、舞が部屋に来た。
ゲームを始めていてよかったと思う。集中し、視界にはいる異物を排除するよう努めた。色々と聞きたい事は山ほどあるが、今は会話をするような気分ではない。
３年前に買ったＲＰＧだが、本線からはずれてカジノで遊んで以降まだ最後までクリアしていなかった。キャラクターのレベルは本来普通にストーリーを進めている場合と比べて１０も違うので、割と楽に戦うことができた。もうそろそろこのエリアのボスだがいつもは攻略本片手に……下手に動いて彼女と話すきっかけを与えたくはない。本なしで戦おう。
そんなところで彼女が先に動いた。
「ねえ」
只今いい所である。これからボスと戦うという所だ。しかし一矢は遠慮なくセーブもせず電源を消した。
顔色ひとつ変えずとはいえゲームに集中していた顔はいい表情には見えない。
「聞かないの？」
どうやら相手は聞いてくるものだと思っていたようだ。屋上で自殺未遂を見られ、挙句の果てにはその目撃者が同居人。これ以上最悪の出会いがどこにあろうか。
ごくっと唾を飲み込み、少し息を吸って、
「お前は何者だ。お前は何を知っている。どうして知っている。あのときの答えはおかしい。お前は何しに来た。何を企んでいる」
ブレス

「まずはこの質問に答えてもらおうか」
質問をした。
今度は逸れた答えなどさせない、そんな一矢の目に彼女は負けたとでも言うように顔で表した。
「私の名前は龍野舞……ということにしといて。知っている事はだいたい全部」
「どうして知ってる」
「見ていたから」
一矢はこいつなめてんのか、という顔をした。
どうも自分の頭の中と彼女の頭の中では根本的に違うような気を持っていた。考え方というより生まれ……そもそものベースが違う気がする。
一矢の顔を少し見て舞は説明をした。
「最初に言っておく。私は人間じゃない。身分としては……わかりやすく言えば天界の学校に通っている学生ってところ。ここに来たのは実習といえばしっくりくるかな？」
「……へぇ」
「この実習の目的としては貴方を監視・介入すること。監視と介入は違うんだけど、基本的に貴方の生活を監視して必要と感じた場合に介入……つまり世界を少し変えるの。貴方たちが言う神様を目指している身だから地上の人間がどんな生活をしているのか現場に出て経験するのもサブ目的なんだけどね」
舞の説明を聞いてしばらくの間静寂が訪れた。
たっぷり１０秒は経って一矢が口を開いた。
「笑えない冗談だな」
果たして一矢の想像通りであったのだが、素直に信じるわけにはいかなかった。
「やっぱりそう思う？　確かに今言ったのはウソだけど、半分当たり。信じようが信じまいが好き勝手だけど」
ウソをついたことに悪びれた風もなく淡々と話す彼女は、確かに

この世の者とは想像しにくい何かがあった。だからといって空から来たのを信じるのも飛躍しすぎだと思う。
「仮に信じたとして。それで？」
「まずは希望を聞いておくわ。あなたの希望はある？」
「……突然の同居人が出てこないような平和な生活」
「……それは私がいないってこと？」
「そう捉えてもらってもかまわないけど」
「そう。つまり私がいないいつも通りの生活ってこと？」
「ああ」
「後輩を襲っておいて勘違いし、自殺しようとして失敗におわって、引きこもる生活？」
「……今よりはましかもな」
「そう……」
そこで話は一度終わった。
その日それ以降は互いに会話することなく、一矢は普段より3時間も早く布団の中におさまった。
眠れない夜をただ時が過ぎるのを待っていた。

2

カーテンからこぼれる日差しで目を覚ました。

「？」

時計を見ると一瞬見間違えたかと思った。５時３４分。学校に行くときよりも１時間以上も早い。

もう一度寝ようとしたが、妙に目覚めがよく、また喉がカラカラなのもあって仕方なく、キッチンに向かった。親はいつも６時に目覚ましをセットしているので静かで暗い。

牛乳をラッパ飲みしてどうにか一息つくと何もする事がなく、また自分の部屋に戻った。

「……」

足元の彼女は静かに寝息をたてていた。

昨日彼女が言っていた事は本当なのだろうか。接した感触といい普通なら知る由もない事を知っているという事実。真っ赤なウソとは言いきれなかった。

「……考えすぎか」

このところまともに外に出ておらず、生活リズムが乱れ、精神不安定なところに彼女が来た。このような性格なのかもしれない。わざと騙そうとしているのかもしれない。きっとそうだ。自分の周りの女性は優しすぎる。テレビとかで男を虫けらみたいに扱う女が登場するが、きっとこいつもいじめることで快感をもたらしているのだ。最低の女め。

一矢はタンスからハンドタオルを取り出した。どこかへ出かけるわけでもないのにその様子は遠足に行く子供のように決められたものとしてしっかりと右手の中におさまっている。そして次は机の引出し。メモ帳や色鉛筆や小学校の頃にあつめていたプロ野球選手のカードまで入っているその中に黄色いカッターを見つける。左手で取り、適当な長さに刃を出した。そして１８０。回って目の前にい

る少女の前に来て、腹のあたりでまたぐように両膝立ちになる。紅白ボーダーのTシャツにライトグリーンのハーフパンツ。クリスマス……不思議とサンタクロースを連想させる格好で寝相の悪さからか横腹を露出している。仮にも男と同じ部屋なのだ。もう少し何らかの配慮があってもいいのではないかと思うのだが、逆に変に意識されたらこっちが住みづらい。

深呼吸を1回。

右手にタオル、左手にカッター、ほぼ馬乗りの体勢。喉が鳴っているのを冷静に感じ取る。こんなやつに欲情しているのか。笑わせてくれる。そっちがその気ならこっちは先制攻撃を起こしてやる。一度やってしまえばこっちのもんだ。Tシャツの裾をつかんでへそが見えるくらいに持ち上げて、もう一度喉が鳴って、瞳孔が開いて

カァ　カァ　カァ　カァ

深夜に出されたゴミ袋をあさって、仲間を呼んでいる烏の鳴き声を聞いた。

「……？」

本当に冷静になれた。

何をしているんだろう。

右手のタオルを、左手のカッターを交互に見つめて何を思ったか。

ゆっくりと馬乗りを解除し、自分のベッドに戻った。

タオルもカッターも手を離れていた。

ブフッ

不思議な笑い声が自分の口の中からもれた。

なんて情けないんだ。

フフッ……

全て自分のせいなのに他人になすりつけて。

フフフ……

こうなったのは全部自分のせいじゃないか。

フフッ……フッ……
彼女の責任にするな。
フフフッ……ウッ……ウー……エグ……
泣いた。もういやだ。自分がいやだ。死ねない自分がいやだ。でも死にたい。この世からあの世からいなくなりたい。
「……」
音を立てて泣き崩れる一矢の後ろ姿を舞はだまって見ていた。

真っ暗で上下左右もわからない所に一矢は立っていた。不思議と不安感はなかった。
すると目の前、手を伸ばせば届く距離に光が差し込まれ何かが形成されていった。
それはひどく懐かしいようでどこか繊細で壊れやすい輪郭。
「唯！？」
忘れる事なんてない。紛れもないそれはかつて一番幸せな時期を共にした相手だった。
「カズヤ……」
一矢は手を伸ばして目の前にいる唯を触ろうとするが、その手前で唯の輪郭を保っていたものが消えた。
「カズヤ……」
背中の方から声が聞こえ、振り返るとさきほどより少しはなれた位置に唯がまた不明瞭な輪郭ながらも立っていた。
一矢は唯に向かって走るが、またしてもあと少しというところで消えてしまう。
「唯……どうしてだよ。唯……唯……」
今にも泣きそうな顔の一矢は追いかけては消えてしまう唯に自分

の感情をうまくコントロールできないでいた。
「唯に会いたい……でも唯に触れない……唯に……ゆゆゆ、ゆい……」
立ち尽くして下を向く一矢。
「唯に触って……だだだ、抱いて……そそそれから……アイを確かめあって……愛を」
カズヤ……カズヤ……カズヤ、カズヤ、カズヤ、カズヤ、カズヤ、カズヤ
「2人の愛を。俺と唯との愛を。……フフッ……愛……フフフフ」
囲むように唯が増えていく。いや、この場合は増殖といった言葉が正しいのか。1メートルの近さから地平線の果てまで唯で埋もれていった。
『カズヤ』
一矢の脳内に直接語りかける声が響き渡った。
一矢はゆっくりと顔を上げる。目の前、自分の周りに何千何万、億かもしれないほどの唯がいた。
本来であればこの異常に気付くべきなのだが、一矢はすでに唯のことしか考えていなかった。だから喜んだ。
「ゆ、唯……よかった。逃げたわけじゃないんだね。嫌われたかと思ったよ。……ありえないもんね。唯とは心も体も交えた仲だもんね。唯は俺を……俺も唯を好きなんだもんね」
嬉しそうに感激の涙を流す一矢に、ひとりの唯が口を開いた。
「ふざけないで」
「……？」
全く考えられない言葉だった。一矢の頭にハテナが浮かぶ。それを感じ取ったのか別の唯がもう一度同じ事を言った。
「ふざけないで」
「……え……なんで？」
辛うじて質問のような言葉を出すのが精一杯だった。

そしてここから別の唯が、ひとりひとつずつ言葉を話しながら会話を成立させていく。
「私を殺しておいて」
「よく平気で生きているね」
「あの時に助けてくれればよかったのに」
温度を感じさせない声。
「気遣いがあれば」「木を持ってくれれば」「手をさしのべてくれれば」「助けを呼んでくれれば」
最も恐れていた言葉。
「自分だけは助かって」「運がいいのか悪いのか」「死にたくても死ねない？　なにそれ」「勝手な自己満？」「自意識過剰だって」「ウザイよね」「死にたきゃ死ねば」「てゆうか死ね」「でも、死ねなかったんだっけ？」「キャハハハ」
逃げ続け家に篭もりがちになった自分はそれでもまだ救われていると思っていた。だがそれは勝手な思い込みだったのか。
「もう相手するのもメンドイ」「つーか消えてほしい」「そうそういい事言うね」「嫌いだもん」「大っ嫌い」「顔もみたくない」「消えろ」「消えろ」「失せろ失せろ」「まー、死ねないんだからどっかにいなくなればいいよ」「勝手にくだらない思い出に浸ってれば？」
自分がこうして今生きているのは代わりに命を背負っているという自覚があったからだ。それすらも否定され、それが背負っている彼女の自身であった。
もう背負うものがない……というより今背負っているのは他人の命などではなく死そのものだ。そしてもう少しで背負うこと自体が不可能な程に重くなっていく。
重い……もう持てない……ああ、苦しい……。
呼吸が苦しい……でも不思議だ、少し楽になってきた。　肉体的というより精神的に。彼女の許しを得たからだろうか。
自分の好きなヒトを助けられない男が今死にます。神様、やっぱ

り唯は許してくれませんでした。自分はこの死をもって償いたいと思います。自分ひとりで足りないと思うけど少しでも唯を楽にできるんだったらお願いです。これが人生最後のお願い。今まで１０回以上使ってきたけど、うそです１００回以上使ってきたけど本当に最後のお願いです。ごめんなさい。

唯、ごめんな。

こんな自分でごめん。

ごめ……、

「――！」

なんだよ、唯。まだ言っておきたい事があったのか。ああ、わかってるよ。こんなところで謝っても今さらどうにかなるわけじゃないけど。本当にゴメン。

「――！！」

なんだよ、唯。ああ、そうか。こんなに楽にしなれたら困るか。だったらもう少し唯の言葉でも聞こうかな。少しでも唯の苦痛が安らぐなら。唯、何だい？

「――い！」

なんだよ、もっとはっきり言ってくれよ。

「――ってこい！」

よく聞こえないや。もう一度。

「死ぬな！　戻って来い！」

世界は白かった。その白の真ん中に見覚えのあるような顔。

「生きてるか！　目が覚めたか！」

目の前の顔はただこちらを見ているだけだった。ゆらゆら視界が揺らぐが身体を揺らされている事に気付くのに少し時間を要した。

「……」

何の事を言われているのかさっぱりわからない。まず自分に対して聞いているのだと思って返事をしようとしたが喉がカラカラに渇

いていて唾を飲み込んだあと辛うじて答えた。
「……ぁ、ああ」
「よかった……」
すると少女は視界から消えた。自分は寝ていて彼女は座り込んでいた。顔を覗き込んでいたのだ。
体を起こそうとして軽い頭痛で視界がぼやけたが我慢できる範囲だったのでかまわず起きた。辺りを見渡すと、ここはまぎれもない自分の部屋。自分の布団に彼女の布団。変わったところは……ない。
「なにが……あった？」
明らかに異変が先ほどにまであった空気だ。だけど外観じゃない。モノがなくなったとかそんなものではない。それに先ほどの発言。生きているか、とか。
なかなか答えない舞に対して一矢は時計を見た。午前9時3分。確かアレがあったのが6時前。ということは3時間も寝ていたのか。親は既に出かけており、家にいるのは自分たち2人だけだ。
「息をしていなかった」
そんな事を頭の隅で考えていたため反応が遅れた。え、何を言ってるんだ。息をしていなければ死んでいるじゃないか。
「何それ。どういうこと？」
「声をかけても返事がなかった。揺さぶっても。無呼吸症候群とか寝ているのとは違って見えた。……そうしたら息をしてなかった。だから蘇生を試した。でも効果がなかった。でも突然――」
起きたのか。
つまり自分はあの夢（？）を見ている間この世にいなかったということか。……笑うしかないな、こりゃ。
思わずにやけてしまった一矢を見て舞が聞いた。
「何があったの？」
「フフ。笑っちゃうよな。一時心肺停止だったなんて。……夢を見たんだ。唯……俺の彼女、だった人の。俺が殺したんだけどな」
それから一矢の語りがしばらく続いた。狙ったものか自然となの

か、端々と話す様はおとぎ話の朗読をしているようで感情が抜け落ちている。所々に力のない笑いが混じった。
「――寸前のところで助けられた……んだな。こういう言葉が適しているのかわからないけど、ありがとう」
「あ……うん」
話し終えての静寂。蝉の声も近くで遊ぶ子供の声も聞こえない。
「俺は」
一矢が沈黙を破った。
「俺は、どうしたらいい？」
自分では答えが出ないゆえに出てきた質問。
だからこれで「もうダメ」とでも答えれば今度こそ屋上から飛び降りるに違いない。だからといって「何とかなる」なんて無責任な答えは向こうも求めていない。
舞はかろうじての所で答えを出した。
「明日考えよう」

その明日は登校日。
舞はもうここしかないと決めていた。

2話　好きじゃない　　完

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0164w/

願願（ねがねが）

2011年10月8日03時20分発行